

研究開発システムWGで今後検討することが考えられる事項
(検討のたたき台)

申し訳ありませんが、やむを得ず欠席しますので、私の検討事項の理解を述べさせていただきます。

以前から主張させていただきましたが、インプットを評価するのではなく、アウトプット（成果）を評価することと、評価に資源（人材、時間など）を費やす必要があると思います。評価の必要性については、研究者コミュニティの理解と主体的な参加がなくては品質保証ができません。誰がどれだけの時間を費やすかは、それぞれの専門分野で異なり、当事者の意見を反映した方が合理的ではないでしょうか。一方、異なる分野間の資源分配は全体的、政治的な判断が必要であり、それが反映され、かつ責任の所在がはっきりした体制づくりが必要です。同一分野の研究の優先順には研究者だけでつけられても、異分野間の優先順位をつけるのには、安全保障、他分野や技術との補完性、代替性や市場の動向や、主観的であることが避けられない将来の見通しなど、科学・技術以外の配慮が必要になってくるからです。当然、評価も目的（同一分野内、異分野間、時間軸）に適応する必要があるのではないのでしょうか。

以下項目別に上に述べた視点から、論点にはある程度の上下構造があるように思います。

総論

○ 資金配分主体の位置付けの明確化

22年度予算のアクションプランの経験を生かして、プロセス（行程）を明確にする必要があります。

○ 研究開発システムにおける PDCA サイクル構築のための具体的方策

研究者の参加して科学的な方法論のもとついた評価制度にする必要があります。データ収集の恒常化などを通じて同じ作業を繰り返しやることを避ける。評価にそれなりの時間と資源を誰かが費やさなければ、信頼のできる評価はできないのではないのでしょうか？

各論 総論にそっての制度設計

○ 研究開発機関間のネットワークの構築

国際ネットワーク、特に東アジアネットワーク整備を行う。国際的な比較優位を見定めて、育成することが大切です。プラットフォームは世界と共有するものでなければ、孤立する危険があります。

○ 研究開発拠点の整備・活性化

分野によって理想的な拠点のあり方（人員や予算の規模、ネットワーク形態など）が異なるので、各拠点に自由度を与えて、アウトプットの評価をしっかりと行う。インプットを細かく規定するのは（例えば研究費の使い方など）硬直性の弊害のほうが大きくなり、成果につながる保障はありません。

○研究開発運営人財の育成・確保の具体的方策

これらの人財は最初にのべた「研究者の主体的参加」の一部でもあると思います。独自の人財育成の体制を有しない研究機関が利用できる、海外派遣をふくめた養成課程を構築して、提示する。地方大学の連合による研究開発運営体制と人財育成を考がえる。

○国際的な頭脳循環の促進

すでに東南アジア・エリアに参加できる研究者は機関を応援すると同時に、今後の人材と機関の育成のなめのインフラ整備。例えば、書類などの英語化、研究補助員の国際化、評価の国際化、ビザ整備など。

失礼いたしました。

2010年8月2日 青木玲子